

シュメール語とエラム語の系統

近藤 健二

キーワード 人称、格、語彙、語根、アジア太平洋諸語

系統不詳の孤立言語と言われる二つの言語の系統を論じる前に、これらの言語がいつの時代に、またどここの国にあったかについて概説しておきたい。「あったか」と過去形で述べたのは、シュメール語もエラム語も遠の昔に消滅してしまっているからである。

シュメール語は、メソポタミア南部で世界最古の文明の一つを築いたシュメール人の言語である。楔形文字で記されたその言語資料は紀元前3000年ころにまで遡るが、シュメール語は一般に以下のように時代区分される。

- 1) 古期シュメール語：初期王朝時代(紀元前2600年～2350年ころ)のシュメール語
- 2) 新期シュメール語：ウル第三王朝時代(紀元前2060年～1950年)のシュメール語
- 3) 後期シュメール語：死語化の道をたどり、古代オリエント世界で文化語として継承されるに至ったシュメール語

エラム語は、現在のイランの南西部にあったエラム王国でエラム人が使用していた言語である。エラム語の時代区分は、紀元前27世紀以前の、絵文字による記録が残る原エラム語を別にすれば、以下に示すとおりである。

- 1) 古期エラム語：絵文字が自然消滅し、アッカド文字によって記録が残されるようになった紀元前26世紀から14世紀にかけてのエラム語
- 2) 中期エラム語：アッカド文字を改変したエラム独自の文字を有するに至った紀元前13世紀から6世紀にかけてのエラム語
- 3) アケメネス朝エラム語：その使用がアケメネス朝王室に限定された、紀元前6世紀から4世紀にかけてのエラム語

シュメール語とエラム語はともに何千年も昔の言語資料をとどめている。にもかかわらず、その出自がこれまで確認されなかったのは、両言語の祖語なるものからの分派がそれよりもはるか昔に起こり、分派した諸言語との接触を長期間にわたって絶たれたからであろう。

1 シュメール語の人称・格標識

筆者は拙論(2003 a、2003 b)において、アジア太平洋地域の諸言語における人称・格標識が具格接辞や属格接辞の祖形として想定される*-ga、*-ti、*-maから成り立ったことを指摘し、それらの言語が一つの源から発したものであることを主張した。本節でもシュメール語の人称標識と格標識を取りあげ、それらが*-ga、*-ti、*-maに遡ることを明らかにして、シュメール語がアジア太平洋諸語の系統をひく言語であることを論じる。

はじめに、シュメール語の人称代名詞の形態を<表1>に示し、それに*-ga、*-ti、*-maがかかっているかどうかを見てみる。

<表1>シュメール語の人称代名詞¹

	1人称単数	2人称単数	3人称単数	3人称複数
主 格	gá-e (me-e)	za-e (ze)	e-ne	e-ne-ne
与 格	gá(-a)-ra gá(-a)-ar (ma(-a)-ra)	za(-a)-ra za(-a)-ar	e-ne-ra	e-ne-ne-ra
終止格	gá(-a/e)-šè	za(-a/e)-šè	e-ne-šè	e-ne-ne-šè
随 格	gá(-a/e)-da	za(-a/e)-da	e-ne-da	e-ne-ne-da
様 格	gá(-a/e)-gin	za(-a/e)-gin	e-ne-gin	e-ne-ne-gin

この表に示した代名詞形には格標識も付随している。たとえば、1人称単数形のgá-eの-eは後述するように能格接辞に由来する主格接辞である。このような語末の格標識は人称代名詞本体の起源とは直接に関係しない。語中の連結音と見なされる部分も同様である。そこで1人称単数はgá-、me-、ma-の、2人称単数はza-の出自が問題となる。3人称単数と3人称複数の場合には、e-が中核的な要素であり、-neは語尾ないしは連結音が語幹化したものであろう。

まず1人称単数のgá-について言うと、これは*-gaの反映形で、[ŋa]に近い音価を有していたと推定される。²拙論(2003 a、2003 b)で明らかにしたように、アジア太平洋諸語では*-gaの反映形を1人称単数代名詞にあてている言語がもっとも多い。シュメール語もそのような言語の一つであると見なすことができよう。

次に1人称単数のme-とma-について言うと、与格のma-は*-maをそのまま

引き継いだものであり、主格のme- はmaが主格接辞-eとの母韻調和によって変形したものであろう。アジア太平洋諸語では*-maの反映形を単独に人称代名詞にあてている言語は稀ではあるが、例がないわけではない。たとえばオーストロネシア語族のヤミ語では、2人称単数視点形は*-gaに由来するkoであるのに対して、2人称単数属格・具格・主格形は*-maに由来するmoである。またたとえば北米インディアン語のダコタ語では、1人称活格が*-gaの反映形 wa (< *-φa < *-xa < *-ʔa < *-ʔa < *ga) であるのに対して、1人称絶対格はma, mi, mである。これらのうちmaとmは*-maの純粋な反映形と見てよい。これに対してmiは、ツングース諸語におけるナーナイ語の1人称単数形のmi³と同様に、*-maを受け継いだ形と*-tiを受け継いだ形とが組み合わさったもののように思われる。*-maと*-tiの反映形が合わさった形であると明確に判断できるものとしては、ビルマ語の1人称単数čəmá(女性語)がある。このčəmáの前身は*čimáであったと推定される。なお、*-maの反映形が*-gaの反映形と合体したものとして、アジア大陸北東端で話されるチュクチ語に1人称単数絶対格gŭmがある。また、*-maの反映形が*-ga、*-tiの反映形と合体したものとして、モンゴル語の1人称単数対格namai-gがある。これは、*-gaに由来するna (< *ŋa < *nga < *ga) と*-maに由来するmaと*-tiに由来するiとが合わさったものに、*-gaに由来する対格接辞-gが付加されたものである。このようにアジア太平洋地域における諸言語で*-maの反映形が1人称代名詞を構成する要素の一つとなっているという事実は、シュメール語の1人称代名詞に現れるme- とma- も*-maの反映形であることを裏付ける傍証となろう。

さて、シュメール語の2人称単数形もまたアジア太平洋諸語の特徴を反映したもののようと思われる。za- は、チベット・ビルマ語派に属するネワール語の2人称単数のchaや、モンゴル語における2人称単数のtšī(主格)、tšīn-ī(属格)、tšamai-g(対格)、tšam-(その他)を構成するtšī, tša-と同様に、そしてまた古代日本語における2人称代名詞のšiや、ツングース諸語における2人称単数形、すなわちナーナイ語のsī, ソロン語のši, 満州語のsiなどと同様に、*-tiの反映形ではないかと推察される。

ところで、3人称単数と3人称複数のe- も究極的には*-tiに遡るものではあるが、その直接の起源は主格接辞の-eに求められる。主格接辞が3人称代名詞の語幹を構成するに至った過程は次のとおりである。すなわち、人称代名詞はもともと含意されるものでしかなかったが、特に3人称代名詞は遅くまでゼロ形態のままであった。しかし、たとえば「彼(ら)が」「彼女(ら)が」「それ(ら)が」という意味が主格接辞を用いてφ-eという形でしばしば表された。その結果、これらの人称的意味が主格接辞の-eに乗り移った。そして-eがほかの格を

標示する接辞よりも使用頻度が高かったために、すべての格に共通する3人称代名詞の語幹になったのである。

-neの起源に関しては異なる二つの推論が成り立つ。一つは、e-が3人称単数主格形として解釈されるようになったために主格接辞が改めて付け加えられた結果、e-neという主格形が生まれ、これがふたたび語幹化したという考えである。もう一つは、3人称単数の語幹であるe-と格標識の語尾とを結ぶ連結音であった-ne-が語幹化して主格にも及んだという考えである。いずれにせよ、-neは語幹の一部として組み込まれ、3人称単数ではe-ne、3人称複数ではe-ne-ne-という新しい語幹が形成された。なお、拙論(2003 a、2003 b)で論じたように、格標識が人称的意味を獲得して人称代名詞となったのは1人称と2人称の場合も同じであるけれども、少なくともシュメール語の場合には、1人称代名詞と2人称代名詞の成立は3人称代名詞のそれよりも時代的に早かったと考えられる。

ここまでの考察によりシュメール語の人称代名詞が格標識の*-ga、*-ti、*-maと関係のありそうなことは分かった。そこで次に、シュメール語の所有接辞と動詞人稱接辞を取りあげ、これらと格標識との関係にも考察を加えておきたい。まず最初に、所有接辞の組織を以下の<表2>に示す。

<表2>シュメール語の所有接辞⁴

	単数	複数
1人称	-gu	-me
2人称	-zu	-zu-ne-ne -zu-e-ne-ne -zu-ne
3人称	-(a-)ni(有生) -bi(無生)	-(a-)ne-ne -bi(おそらく集合的)

この表に示した形態のうちアジア太平洋諸語の特徴をもっとも色濃く反映しているのは、1人称単数の-guである。アジア太平洋諸語における1人称単数代名詞の属格形あるいは所有接辞の1人称単数形は、たとえばオーストロネシア語族のヤミ語ではko、コシャエ語ではk、チベット・ビルマ語派のロコ語ではŋa、ツオナー・モンパ語ではŋu-ku(文浪方言)、ŋu-ko(麻瑪方言)といったように、*-gaの反映形と見なされるものが圧倒的に多い。シュメール語の-guが同じ*-gaを受け継いだものである可能性はきわめて高いと言えよう。

シュメール語の所有接辞には、人稱代名詞の場合と同様、*-tiと*-maもかか

わっている。2人称単数の-zuは、2人称単数代名詞のza-と同様に、*-tiの反映形であろう。また1人称複数-meは、1人称単数代名詞の主格・与格に現れる-me、-maと同様に、*-maの反映形であろう。人称代名詞では1人称単数において競合関係にある*-gaと*-maの反映形が、所有接辞では1人称の単数と複数との間で棲み分けを行っていると考えることができる。

一方、3人称単数の-(a)niと3人称単数および複数の-biはその成り立ちが定かではない。しかし-biは、ツォナー・モンパ語の3人称単数属格-bi-ku(文浪方言)、-pe-ko(麻瑪方言)の-bi、-peと同源かもしれない。そして-biは、*-maの反映形*-mと*-tiの反映形*-iが合体した*-miが*-mbiという形を経てできたものかもしれない。なお、2人称複数と3人称複数に現れる-ne-neは人称代名詞の複数形接辞をそのまま取り入れたものであり、-neは-ne-neが短縮したものであると見なされる。

所有接辞の検討はこれだけにして、次に、シュメール語の動詞人称接辞について考えてみたいと思うが、ここでは以下の〈表3〉に示した与格形だけを考察の対象にする。与格形に焦点を絞るのは、一つには与格形だけが人称ごとに異なる形態を有するからである。また一つには、与格を標示する人称接辞は、それが格標識に由来するものであることを明確に示唆しているからである。

〈表3〉シュメール語の与格人称接辞⁵

	単数	複数
1人称	ma-	-me-
2人称	-ra-	?
3人称(有生)	-na-	-ne-

動詞人称接辞は、もちろん動詞に付属する。そして、それが標示する格によって形態が異なる。にもかかわらず、それを人称標識と格標識とに分割することが一般に困難である。たとえば〈表3〉のma-「私に」について言うと、ma-のどこが「私」という人称的意味を担い、どこが「～に」という与格的意味を担っているのか容易には判断できない。

しかし伝統的に、シュメール語の与格人称接辞のうち、1人称単数ma-の語構成は/mu-a-/であり、3人称単数-na-「彼・彼女・それに」の語構成は/-n-a-/であると説明される。つまり、ma-はmu-「私」に、-na-は-n-「彼・彼女・それ」に所格接辞の-aが付されたものであるというのである。しかし、このような説明は〈表3〉の他の形態にはあてはまりそうにない。このことを確かめるために、そして〈表3〉の諸形態と格標識との正確な関係を探るために、シュメー

ル語の格標識の一覧を下の〈表4〉に示してみよう。

〈表4〉シュメール語の格標識⁶

	有生名詞	無生名詞
絶対格	-ø	-ø
能格	-e	-e
属格	-(a)(k)	-(a)(k)
与格	-ra	
奪格		-ta
具格		
所格		-(c)a
向格 ⁷	-šè / -š	-šè / -š
近接格 ⁸		-e
随格	-da	-da
様格	-gim / -gin	-gim / -gin

〈表4〉に示された格標識のうち、ここでの議論にかかわるのは与格接辞の-ra「～に」である。これは、〈表3〉の-ra-「あなたに」、および〈表1〉のza(-a)-ra「あなたに」と比較されるべきである。これらが実際の文献でどのように使用されているかを示すために、吉川(1989:231-232)に依拠して以下の例をあげてみよう。

- (1) *ensí-ra ama-ni dingir nanše*
 長官-に(与) 母-彼の 神 ナンシュ(絶)
*mu-na-ni-íb-gi-gi*⁹
 接頭辞-彼に(与)-それにつき(所)-それを(対)-答える-答える
 「長官に彼の母ナンシュ神は答える」
- (2) *èš-e-ninnu-na¹⁰ dù-ba za-ra*
 聖所-エ・ニンヌ-彼の～この(属) 建造-その～につき(所) 汝-に(与)
ma-ra-an-du
 接頭辞-汝に(与)-彼が汝に-言う
 「彼の聖所エ・ニンヌの建造を汝に命令した」

今ここで検討しようとしている問題の核心は、上の例文(1)の*ensí-ra*における-ra「～に」と(2)の*za-ra*における-ra「～に」が(2)の*ma-ra-an-du*における接中辞-ra「汝に」と形態的に一致していることにある。トムセン(1984:220)はこれを偶然の一致と見ているが、私見では、両者の起源は同一である。すなわち、

<表3>の2人称単数与格接中辞-ra-は、<表4>の与格接辞-raに2人称的意味がかぶさったものである。

この考えが正しければ、<表3>の1人称単数与格接頭辞ma-と3人称単数与格接中辞-na-も、格標識の*-maと*-gaに由来する形であると考えるのが自然ではあるまいか。拙論(2003a、2003b)で明らかにしたように、アジア太平洋諸語では*-gaが*-nga>*-ŋaという変化を経て-naになったと見なされる例は枚挙に暇がないほどである。そもそも、ma-と-na-がmu-「私」と-n-「彼・彼女・それ」に所格接辞-aが付いてできたものであるという説明には無理がある。<表4>に示されているように、所格接辞の-aは無生名詞に特有なものだからである。

ところで<表3>の1人称複数-meは、<表2>の1人称複数所有接辞-meが与格人称接辞として転用されたもののように思われる。一方、3人称複数接中辞-ne-は1人称の類推によるもの、すなわち「ma-:me=-na-x」という比例式にもとづいて生成された形であろう。とすれば、2人称複数の与格人称接辞は-re-であったかもしれない。

ここまでの議論は、ほとんどもっぱらシュメール語の人称標識が*-ga、*-ti、*-maに由来するものであることを論証しようとするものであったが、本節のしめくりとして、<表4>に示したシュメール語の格標識に関してもそれが*-ga、*-ti、*-maと結びついているかどうかを確認しておかねばならない。

まず能格接辞の-eについて言うと、これはおそらくサモア語の具格・能格標識のeと同様に、*-tiが*-iになり、この*-iがさらに弱化して-eになったものと思われる。ちなみに、人称代名詞における主格接辞の-eは、他動詞文主語に付せられた能格接辞の-eが自動詞文主語にまで拡張することによって生じたものである。

近格接辞の-eも、形態的には能格接辞の-eと同じ経路をたどって生まれたものにちがいない。そしてこの-eは、形態的にも機能的にもアイヌ語の-eと比較されねばならない。アイヌ語では-e-がai-e-kot「矢で死す」のように具格標識として機能する一方で、Poropet-e-arpa「幌別へ行く」のように向格標識としても機能する。

-tiに遡るシュメール語の格標識は-e以外にいくつもある。奪格・具格接辞の-ta、所格接辞の-(c)a、向格接辞の-sè / š、随格接辞の-daは、-tiの明確な反映形と言えるだろう。なお、具格接辞としての-taは日本語で「歩いて行く」などと言うときの-teと比較されるべきであり、向格接辞の-sèは日本語東北方言で「町さ行く」などと言うときの-saと、また随格接辞の-daは日本語で「友達と行く」などと言うときの-toと比較されねばならない。日本語の-te、-sa、-toもその起源は

*-tiである。

-gaを受け継いだシュメール語の格標識は、属格接辞の-(a)(k)と与格接辞の-raである。-raは-ga>*-ra>*-raという変化をたどったものと考えられる。

以上のように、シュメール語の格標識には*-gaと*-tiが確実にかかわっている。これに対して*-maは、「～のように」を意味する様格接辞-gim / -ginにその痕跡をわずかにとどめているにすぎない。シュメール語では、*-maはもっぱら動詞接頭辞のma- やmu- として受け継がれたようである。

2 エラム語の人称・格標識

この節では、エラム語の人称・格標識を取りあげ、それと格標識*-ga、*-ti、*-maとの関係性を論じることによってエラム語もまたアジア太平洋諸語の系統をひく言語であることを明らかにする。最初に、中期エラム語の人称代名詞の組織を下の<表5>に示す。

<表5>中期エラム語の人称代名詞¹¹

		主格	対格
単数	1人称	u	un
	2人称	nu(n-)	nun
	3人称	r-	(i)r
複数	1人称	nuku / nika	nukum
	2人称	num / nun	numun
	3人称	p-	apun(>apin)

この表において注目すべき形態は主格単数のu、nu(n-)、r-である。これ以外の形態は、基本的に主格単数形を基盤にして組み立てられたものと見てよからう。それにしても、u、nu(n-)、rを*-ga、*-ti、*-maとどうやって結びつけることができようか。北米インディアン語のフバ語に*-gaの反映形と見られる1人称単数動詞接辞-wあるいは-ūw¹²と2人称単数代名詞nあるいは-inがあったり、同じ北米インディアン語のチヌーク語に3人称単数中性形のL-があったり、フバ語でLが具格接辞であったりすることを考えると、またアジア太平洋諸語のいくつかの言語において*-gaがnaやnuとなっていることを考えれば、エラム語のu、nu(n-)、rも*-gaの反映形のように思われるが、そうであると断定するには証拠が万全ではない。

そこで今度は、人称代名詞と関係の深い動詞人称接辞を取りあげて、それと **-ga*、**-ti*、**-ma* とのつながりを調べてみる。下の〈表6〉に中期エラム語の、〈表7〉にアケメネス朝エラム語の人称接辞を示す。いずれも主語を標示する接辞である。エラム語には、目的語を標示する動詞人称接辞は存在しない。

〈表6〉中期エラム語の動詞人称接辞¹³

	単数	複数
1人称	/-h/	/-hu/
2人称	/-t/	/-ht/
3人称	/-š/	/-hš/

〈表7〉アケメネス朝エラム語の動詞人称接辞¹⁴

	単数	複数
1人称	/-∅/	/-u/
2人称	/-t/	/-t/
3人称	/-š/	/-š/

これら二つの表を比べて分かるように、アケメネス朝エラム語ではhの音がすべて消失した結果、1人称単数が∅（ゼロ形態）となり、2人称と3人称において単数と複数の区別が失われてしまっている。したがって**-ga*、**-ti*、**-ma* との比較は、〈表6〉に示した形態との間でなされなければならない。

ライナー(1969:76)は、中期エラム語の動詞人称接辞の複数形/*-hu*/と/*-ht*/と/*-hš*/は単数形を二つ重ねた/**-hh*/と/**-tt*/と/**-šš*/から成ったものかもしれないと述べているが、あるいは/*-hu*/のほうが/*-h*/よりも古い形かもしれない。すなわち、*-hu*から*-h*という異形態が生まれたとき、/*-h*/を単数形にして、/*-hu*/を複数形にするという区別が生まれ、続いて、複数形の*-hu*と人称代名詞の1人称単数形*u*との類推から2人称の/*-t*/と/*-ht*/という区別、そして3人称の/*-š*/と/*-hš*/という区別が生まれたのかもしれない。なお、人称代名詞の1人称単数形*u*に関してもその前身は**hu*であったと推察される。

さて、/*-h*/が/*-hu*/から生まれたにせよ、/*-h*/が/*-hu*/を生みだしたにせよ、これらの形態は、たとえばオーストロネシア語族のチャモロ語における1人称単数代名詞の主格*hu*、属格*-hu*、強調形*guahu*、チベット・ビルマ語派のディガール語における1人称単数代名詞*ha*、およびハニ語における具格・能格接辞*-ha*、北米インディアン語のトリングット語における1人称単数代名詞の主格*x*あるいは*xa*、さらに古代日本語における話題化接辞-*wa*(>*-wa*)などと同様に、その起

源を*-gaに求めることができる。

一方、動詞人称接辞の2人称単数形/-t/は、シュメール語の2人称単数代名詞zaと同様に*-tiの反映形であろう。また3人称単数の-šも、*-ti>*-či>-šiのような変化の結果であると見なすことができる。*-tiの反映形を3人称にあてるとは珍しいことではあるが、ほかに例がないわけではない。たとえば、チベット・ビルマ語派の口語における3人称単数代名詞tshや、ディガール語における3人称単数代名詞cyáは*-tiを受け継いだものであると考えられる。

ところで、エラム語がアジア太平洋諸語の系列に属する言語であることは、その格標識からもうかがえる。エラム語には主語と目的語を標示する特別な形態は存在しないが、所有関係を表す属格接辞、道具・手段を表す具格接辞、場所を表す所格接辞などが存在する。そして以下に示すように、これらの接辞が*-ga、*-ti、*-maと深くかかわっている。

中期エラム語の属格接辞は、「AのB」と言うときのB、つまり被修飾語が1人称の話し手(locutive)か、2人称の聞き手(allocutive)か、3人称の話題のもの(delocutive)のいずれを表すかによって以下のように使い分けられる。

<表8>中期エラム語の属格接辞¹⁵

1人称：/-k/ (語幹の末尾が子音の場合は-ka、-ki、-ki-ik)¹⁶

2人称：? ¹⁷

3人称	有生・単数	：/-r/ (語幹の末尾が子音の場合は-ri)
	無生	：/-me/

ここで言う1人称と2人称と3人称の区別について注釈しておきたい。1人称と2人称というのは1人称代名詞と2人称代名詞のことだけではない。普通名詞あるいは固有名詞であっても、それが話し手自身を表す名詞であれば1人称に属し、聞き手を表す名詞であれば2人称に属す。そして3人称は、1人称でも2人称でもない話題のものである。たとえば、「この国の王」という表現において「国」は常に3人称であるが、「王」の人称は、このように表現した人物自身が「王」であれば1人称であり、聞き手が「王」であれば2人称であり、話題の人物が「王」であれば3人称ということになる。下に、ライナー (1969: 102) から実例を引いておこう。

(3) sunki-k Ančan-Šušun-ka

王-私 アンチャン-シューシュン-の(属)

「私、アンチャンとシューシュンの王」

- (4) Kiririša . . . amma napi-p-r
 キリリシャ 母 神-複数-の(属)
 「神々の母、キリリサ」
- (5) nappi-p Šušen-p
 神-複数 シューシュン-の(属)
 「シューシュンの神々」
- (6) kullak u-me
 祈り 私-の(属)
 「私の祈り」

さて、エラム語の属格接辞には少なくとも*-gaと*-maがかかわっているように思われる。上の(3)に見られる-kaは*-gaの反映形であり、(4)の-rも*-ga>*-ra>*-ra>-rといった変化をたどったものであろう。一方、(5)の-pは*-ma>*-mpa>*-pa>-pという変化を変化をたどったものかもしれない。(6)の-meは*-maを継承したものにはちがいない。仮に2人称名詞を修飾する属格接辞が-tであったとしたら、エラム語の属格接辞の成り立ちには*-ga、*-ti、*-maの三つがかかわっていたことになる。

アジア太平洋諸語には*-gaの反映形が属格接辞となっている言語が圧倒的に多いけれども、*-tiと*-maの反映形が属格接辞となった例もないわけではない。たとえば古代日本語には*-gaを継承した-gaと-nōとは別に、*-tiの反映形である-tuも非生産的な属格接辞として存在した。北米インディアン語のマイドゥ語では-kiが主要な属格接辞であり、-mが副次的な属格接辞である。-kiは*-gaの反映形か、*-gaと*-tiの組み合わせだったものであろう。一方、-mは明らかに*-maを引き継いだものである。

ところで、ネパールのカトマンズ盆地を故地とするネワール語はチベット・ビルマ語派に特徴的な類別詞を有するが、これとエラム語の属格接辞との間に無視することのできない類似性が認められる。ネワール語の類別詞には以下に示す三つの用法がある。¹⁸

- 1) 数詞に付属して助数詞として機能する。有生名詞には-mhaが用いられる。無生名詞に対しては日本語の-ko(個)に相当する-guが広く用いられる。また、物の形状に従って使い分けられる-ga(球形)、-pa(平面状)、-pu(細長)、-ca(円形)などがある。
- 2) -mha、-pī、-guが動詞・形容詞、あるいは名詞の属格に付属して、名詞の修飾語を形成する。非修飾語が有生名詞の単数の場合には-mha、複数の場合には-pī、無生名詞の場合には-guが用いられる。なお、-mha、-pī、-guの使用は動詞・形容詞の後では義務的であるが、名詞の属格の後では選択

的である。

- 3) *-mha*、*-pī*、*-gu*が動詞・形容詞に付属して、それを名詞に転換する。*-mha*は「～人・動物」、*-pī*は「～人々・動物たち」、*-gu*は「～こと・もの」という意味の名詞を構成する。

これら1)～3)の用法のうち、少なくとも1)と2)に用いられる形態はもともと属格接辞であったと考えられる。すなわち、1)は名詞としての数詞に形容詞機能を付与するための属格接辞の機能が名詞を類別するための機能に転じることによって生まれた用法である。2)の用法も、基本的に1)と異ならない。動詞・形容詞に属格接辞を付加したのは、その連体形をつくるためであった。もともと、名詞の属格はそれ自体すでに名詞を修飾する機能を備えているわけであるから、それに*-mha*、*-pī*、*-gu*を付け加えるようになったのは二次的変化であったと見なさなければならない。すなわち、ネワール語の属格接辞 ya (<**-nya*<**-na*<**-ṅa*<**-nga*<**-ga*)に*-mha*、*-pī*、*-gu*が付け加わった形はいわゆる二重属格ではなく、属格接辞に類別詞としての*-mha*、*-pī*、*-gu*が付加されたものである。なお3)の用法は、2)の用法における被修飾部分が省略されて生じたもののように見える。しかし、そうであると断定することはできない。というのも、アジア太平洋諸語では**-ga*、**-ti*、**-ma*の反映形が広く名詞化接辞として用いられはするけれども、属格接辞としての**-ga*、**-ti*、**-ma*に遡る名詞化接辞は比較的に少ないように思われるからである。

ネワール語の類別詞の少なくとも主要部分がもとは属格接辞であったとして、それがエラム語の属格接辞とどのように似ているかについて述べておきたい。有生名詞の単数を標示するネワール語の*-mha*は、無生名詞を標示するエラム語の*-me*と同様に**-ma*の反映形であろう。そして無生名詞を標示するネワール語*-gu*は、有生名詞の単数を標示するエラム語の*-k*や*-ka*と同様に**-ga*の反映形であろう。さらに有生名詞の複数を標示するネワール語の*-pī*は、それが**-ma*に遡るものかどうかはともかくとして、同じ有生名詞の複数を標示するエラム語の*-p*と同源であろう。なお、一方の言語で有生名詞の単数を標示するのと同類の形態が他方の言語で無生名詞の標識になっているという食い違いは、**-ga*と**-ma*から派生したいくつかの形態にいろいろな機能を割り振るさいに生じた差であり、これはいわば、1人称単数代名詞に**-ga*の反映形をあてる言語があったり**-ma*の反映形をあてる言語があったりするのと同じことである。

エラム語の属格接辞に関する考察はこれまでにして、属格以外の主要な格標識と**-ga*、**-ti*、**-ma*との関係にもふれておきたい。ライナー(1969:96-97)によれば、英語の*in*に相当する所格標識は*-ma*である。これはビルマ語の所格接辞*-mah*、*-ma*と比較されるべきものであり、**-ma*を引き継いだものと見てよい。

アケメネス朝エラム語に見られる奪格接辞-mar「～(の場所)から」は同じ所格接辞-maと*-gaの反映形-r(*-ra<*-ra<*-ga)とが合体したものであり、これは場所を表す-kaと*-gaの反映形-raとが合わさった日本語の奪格接辞-karaと成り立ちが同じであると考えられる。一方、向格接辞は-ikku「～に」であった。これには-ikkiという異形態もあったが、-ikkuは*-tiの反映形である-iと*-gaの反映形-kuが合体したものであり、-ikkiは-ikkuが母韻調和を起こしたものであろう。同様に、アケメネス朝エラム語にだけ見られる随格接辞の-itaka「～と一緒に」も*-tiと*-gaがかかわっているように思われる。さらに、エラム語には材料を表す具格接辞として-imma、-inni、-ni、-yaという形が存在したが、これらには*-ga、*-ti、*-maの三つがかかわっているように思われる。

ここで、ライナー(1969)の文法記述ではふれられていない事実を指摘しておきたい。それは行為者を表す具格接辞にかかわる事柄である。中期エラム語には上の<表8>に示した属格接辞があったが、これと基本的に同じ形態が道具・手段・行為者を表す具格接辞としての役割を果たしたようである。

(7) *hutta-h halen-k*

作る-私 苦勞-具格

「私は苦勞して作った」

この例における-kは、「～によって」という具格的意味を表している。しかし、このような意味を表すときにいつも-kが使用されたわけではない。kは、1人称の「私」がかかわっている場合にしか用いられなかった。この意味において、kは「私の～によって」という意味、つまり人称標識と格標識とが組み合わせられた意味を表していると言えそうである。ところで、ライナー(1969:102)は次の例を所有構文と見なしているけれども、私見では、具格が行為者を表している構文である。

(8) *puhu kuši-k u-p ak Nahunteute-p*

子孫 作る-受動 私-具格 そして ナフンテウテ-具格

「私とナフンテウテによって作られた子孫」

この例において具格接辞が-pとなっているのは、puhuが3人称の有生・複数名詞(ただし不変化)であることによる。仮にpuhuに代わって3人称の有生・単数名詞が使われたら、具格接辞は-rとなるはずである。また3人称の無生名詞が使われたら、それは-meとなるはずである。なお、このような文法現象はアケメネス朝エラム語には観察されない。そこでは、-naが所有・所属関係を表す唯一の形態になるとともに、受動文と見なされる文においても行為者はすべて-naによって標示されるようになった。ハロック(1969)による『ペルセポリス城砦文書』の第49文書から例を一つ引いておこう。

- (9) 30 mar-ri-iš w.GEŠTIN.lg¹⁹ kur-min m.Ú-sa-ya-na
 マリッシュ ウイン 支給する ウサヤ-により(具)
 「ウサヤによって支給された30マリッシュのワイン」

エラム語の人称標識と格標識についての考察を終える前に強調しておきたいのは、両者が形態的に類似しているということである。〈表8〉の具格接辞と基本的に同形であると述べたが、この接辞は〈表5〉に示した人称代名詞、および〈表6〉に示した動詞人称接辞との間にも類似点が認められる。それどころか、エラム語の所有・所属を表す属格接辞、および受動文において行為者を表す具格接辞は、名詞に付される人称標識、すなわち名詞分類の標識と基本的に同形である。ここで「基本的に」と述べたのは、一つには、3人称の無生名詞を標示する-meは所属を表す場合と、たとえばsunki「王」からsunki-me「王国・王権」のような名詞を派生させる場合に用いられるものであり、そのほかの場合にはゼロ形態だったからである。そしてもう一つには、amma「母」やpuhu「子孫」のような親族名詞は不変化詞に属し、人称接辞が付かなかったからである。しかしこのような差異を度外視すれば、属格接辞や具格接辞として機能する形態と名詞の人称標識とはほぼ完全に同形であった。たとえば、先の(3)に示したsunki-k Ančan-Šušun-ka「私、アンチャンとシューシュンの王」においてAnčan-Šušun-ka「アンチャンとシューシュンの」の属格接辞は子音の後であるがゆえに/-k/が-kaになっているにすぎないので、それはsunki-k「王-私」の人称標識-kと実質的には同形であると言いうる。この事実は、エラム語の人称標識が格標識から生まれたものであることを物語ると同時に、エラム語がアジア太平洋諸語の一員であるという主張を支える強立な証拠となる。

3 シュメール語とエラム語の語彙

ここまでは人称標識と格標識の成り立ちを調べることによってシュメール語とエラム語がともにアジア太平洋諸語の仲間であることを論証しようとしてきたが、本節ではいわば最後の駄目押しとして、シュメール語の語彙を他言語の語彙と比較する。エラム語に関しては、辞典類の整備が遅れているため、その語彙を詳細にわたって把握することが困難である。したがって、非常に限られた考察を加えることしかできない。

以下の〈表9〉は、シュメール語と中国語・朝鮮語・古代日本語との間に同系性が認められると筆者が判断した語(固有語に限る)を列挙したものである。それぞれの語は、その語根をあぶりだすために分節化して示すとともに、語義

は基本義と見なされるものを原則として一つだけ示した。なお、シュメール語の語義はデリッツシュ(1914)に依ったものである。

<表9>シュメール語と中国語・朝鮮語・古代日本語との語彙比較

シュメール語	中国語	朝鮮語	古代日本語
a-b「天」		ha-nu-1「天」	a-ma「天」 a-me「天」
a-bu「父」	fū-te' i-n ²⁰ 「父親」 bà-ba「父ちゃん」	a-b-o-jī「お父さん」 a?-pa「父ちゃん」	ti(-ti) ²¹ 「父」 to(-to)「父」 ši-ši「父」
a-lâ-ku「歩く」 rá「歩く」 ri「歩く」 a-rá「歩き」			a-ri-kuu「歩く」 a-ruu-kuu「歩く」
a-ma「母」 u-m「母」	mu-tc' i-n「母親」 mā-ma「お母さん」	o-mo-ni ²² 「お母さん」 o-m-ma「母ちゃん」	a-mo「母」 a-ma「尼」 φa-φa ²³ 「母」 ka-ka「母」
a-ma「水」 a-ma「洪水」 a-ma-m「にわか雨」 a-ma-ru「津波」	mò「泡」	mu-1「水」	a-ma「海」 u-mi「海」 a-ma「海人」 a-me「雨」
ba「分ける・配る」 ba「部分」	fēn「分ける」 bù「部分」		wa-kuu「分く」 ku-ba-ruu「配る」 φa-bu-ruu「屠る」 φo-φu-ruu「屠る」
ba-1「突破する」 ta-ba-1「打破する」 ba-1「斧」	pò「破れる」 dǎ-pò「打破する」 fǔ「斧」	bu-su-「壊す」 ta-pa-「打破する」	ya-bu-ruu「破る」 ko-φa-su「毀す」 bu-tu「打つ」
ba-1「掘る」	wā「掘る」	pa-「掘る」	φo-ruu「掘る」 φa-ruu「掘る」
ba-1「こぼれる」	mà-n「溢れる」	bu-1「溢れる」	a-bu-ruu「溢る」 ko-bo-ruu「零る」

ba-l「話す・読む」			no-bu「述ぶ」
ba-r「分ける・離す」	fē-n「分ける」		wa-ku「分く」
ba-r「結ぶ・縛る」	bǎ-ng「縛る」		ši-ba-ruu「縛る」
ba-r-si(-g)「縄」	šé-n-g ²⁴ 「縄」	ba-t-ju-l「縄」	na-φa ²⁵ 「縄」 na-φu「縄ふ」
ba-r「場所」			ba「場所」
bi「火を起こす」	hu-ō「火」	pu-l「火」	φi「火」
da「場所」	di「地」	tʔ-ng「地」	to/tō「処」
ta「場所」	ti-án「田」		ta「田」 to「外・戸」 tō「跡」 tuu「津」
da-l「遠ざかる」	fā「発つ」	tʔo-na-「発つ」	ta-tuu「発つ」 to-φo「遠」
da-l「逃げる」	tá-o「逃げる」	to-ma-ŋ「逃亡」	
dá-g「添える」	ti-ān「添える」	to-ha-「添える」	so-φu「添ふ」
da-r「倒れる」	dǎ-o「倒れる」	sʔu-rɔ-ji-「倒れる」	ta-ʔu-ruu「倒る」
de「話す」	tā-n「話す」 dà-o「話す」	tʔo-du-l-「話す」 du-l-「話す」	ka-ta-ruu「語る」
di-m「締める」	tci「絞る」	ta-ji「締める」	ši-mu「締む」
di「連れて行く」	li-ng「連れて行く」	te-ryo-ga-「連れて行く」	tuu-ruu「連る」
di-b「掴む・取る」	tš' u-ā「掴む」	ča-p-「掴む」	tuu-ka-mu「掴む」 to-ruu「取る」
du「住む」	tš' ù「住む」		suu-mu「住む」
dù「持つ」	dà-i「持って行く」	tuu-l-「持ち上げる」	mo-tuu「持つ」
dù「裂く・解く」	sī「裂く」	či-tʔa-「裂く」	ta-tuu「絶つ・裁つ」 to-kuu「解く」

dū「突く」	ts'i「刺す」	či-ru-「突く」	tu-ku「突く」
dú「する・作る」 du-g「作る」	tsu-ō「する・作る」	-da(～する) -ha-da(～する) ma-n-du-1-「作る」	tu-ku-ru「作る」
du「頭」	tóu「頭」		zu「頭」
du-g「読む」	dú「読む」		
ê「家」 e-š「家」	tcí-ā「家」 tsi「家」	či-b「家」	i-φe「家」 i-φo「庵」
e「水路・堀」	à-i「岸」(方言)		ye「江」 yi「井」
e「読む・話す」	yü-e「言う」(古語)	wa-1 ²⁶ 「曰く」	i-φu「言ふ」 i-φa-ku「曰く」
ga-r「する」 a-ga-ga-r「する」 a-g「する」	gà-n「する」		-ga-ru「～がる」
gê「夜」	yè「夜」		yo「夜」 yo-ru「夜」
gi-š「木」 ge-š「木」			kō「木」 kī「木」
gú「首」		mo-k「首」	ku-bu「首」 ku-bi「首」
gù「話す・叫ぶ」	gà-o「告げる」 kū「泣く」		tu-gu「告ぐ」 na-ku「泣く」
gú「苦勞？」 gu-n「苦勞？」	kū「苦」		ku「苦」(漢語?)
gú-ba-r-ra「野原」 gá-n「野原」 gú「場所」 gu-n「場所」		pöl「原」	no-φa-ru「野原」 no-φa-ra「野原」 no / nu「野」 φa-ra「原」

gú-ba-r-ra「放る」	pō「(水を)まく」 pā-o「放る」	bī-t-「注ぐ」	φa-φu-ru「放る」 φa-bu-ru「放る」
gú-gá-gá「かがむ」 gú-ga-m「かがむ」		gu-bu-li-「かがむ」	ka-ga-mu「かがむ」
gú-ga-r「曲がる」 gū-r「曲がる」 ga-m「曲がる」		gī-b-「曲がる」	ma-ga-ru「曲がる」 ma-ga「禍」
gu-r「刈る」	gē「刈る」	ga-l-「刈る」	ka-ru「刈る」
gu-r「駆ける」	tc'ū「駆ける」		ka-ku「駆く」
gā ²⁷ 「魚」 šŭ-gā「漁師」	rò-u「肉・身」 yú-fú「漁師」	ko-gi「肉・身」	u-wo「魚」 i-wo「魚」 na「肴」
i-r「行く」	tc'ù「行く」	ga-「行く」	i-ku「行く」 i-nu「往ぬ」
ka「口・顔」	kō-u「口」		ku-tu「口」 ku-ti「口」 ka-o「顔」 ka-ši-ra「頭」
ka「果实」	gu-ō「果实」		
ka-r「引き離す」		ka-ru-「分類する」	ka-ru「離る」
ki「場所」 ku-š「場所」 kú-r「陸地」			ka / ku / ko「処」 ku-ga「陸」 ku-nu-ga「陸」
ki-r「切る」 ku-r「切る」 ku-r-m「切る」 ku-d「切る」			ki-ru「切る」
kú「食う」			ku-φu「食ふ」 ku-ra-φu「食らふ」
ku「借りる・雇う」	gù「雇う」		ka-ru「借る」

ku-ku「良い」	hă-o「良い」		yö-ši「宜し」 yö-ra-ši「宜し」 yö-rö-ši「宜し」
ku-r「括る」	ku-ò「括る」		ku-ku-ru「括る」
la-m-mu-bi ^{しらみ} 「虱」	ši「虱」		ši-ra-mi ²⁸ 「虱」
lú「人」 u-l「人」	ré-n「人」	o-lu-n「大人」	-ri「～人」 ^{b)}
ma「名前」	mí-ng「名前」		na「名」
mê「水」 mû「水」		mu-l「水」	mi(-zu)「水」
na-g「飲む」		no-m-gi-「飲みこむ」	no-mu「飲む」
na-「～な(禁止)」			na～(so)「～な(禁止)」
nu「人」	nũ ^{やつ} 「奴」		
nu-「～ない(否定)」			-nu「～ぬ(否定)」
pa「棒・杖」	bà-ng「棒」	ji-pa-ng-i「杖」	
sa-g「誓い」	ši「誓い」		
si「角」	tci-a-o「角」		
sí「与える」 si-m「与える」	tci「与える」	ju-「与える」	
sú「齒」 zu「齒」	tš' i「齒」		
sù「唇」	tší-tš' ū-n「唇」		
su「肉」		sa-l「肉」	ši-ši「肉」
su-r「歌う」	tša-ng「歌う」		
ša「遮断する」	tšē「遮断する」		

ša-r「草色の」	ts' ä-o「草」 ts' ä-o-lù「緑」		ku-sa「草」 mi-dö-ri「緑」
še「寒さ・霜」	šü-ng「霜」	so-ri「霜」	ši-mo「霜」 sa-mu-ši「寒し」
še「穀竝」	tši「穀竝」 tšö-ng-tsi「種子」	šzi「種子」	ku-sa「種」
še-n「鮮やかな」	ci-än「鮮やかな」		
še-š「すりこむ」	tc' ä「こする」 ts' ö「こする」	s?u-l-「こする」	su-ru「擦る」 sa-su-ru「摩る」 ko-su-ru「擦る」
še-š「兄弟」	ci-ö-ng「兄」		še「兄・夫・背」
ši「生活」	šē-ng「生きる」	sa-l-「生きる」	
ši-d「数」 ši-ti「数」	su「数」		
ši-ki-n「土器」	ts' c-tci「磁器」		
ši-la-m「雌牛」	ci-ni-ú「雌牛」	su-ko-t「雄牛」 a-m-so ²⁹ 「雌牛」	
šu「手」 šu-si「指」	šou「手」 šou-tši「指」	so-n「手」	ta / te ³⁰ 「手」
šú-ga-r「行う」	tcú-ci-ng「行う」	s?u「使う」	su「為」
šú-ta-kar-daḡ「救う」			su-ku「助く」 ta-su-ku「助く」
u「王」	wá-ng「王」		
u-r「犬」			i-nu「犬」
u-š「血」	cié「血」		tu / ti「血」 ti「乳」
ta-g「倒れる」	dä-o「倒れる」	ča-p?a-ji-「倒れる」	ta-φu-ru「倒る」

ta-g「叩く」	dǎ「叩く」	tʔæ-ri-「叩く」	ta-ta-kuu「叩く」
ta-r「分ける」	du-àn「切る」	ča-ruu-「切断する」 sʔo:l-「刻む」	
te(-gá)「近づく」	ti-ē-tci-n「近づく」	da-ga-o-「近づく」 da-ga-ga-「近づく」	ti-ka-zuu-kuu「近づく」
tu「風」			ti「風」
tu-b「土」	tú「土」 dī「地」	tʔ-ng「土・土地」	tuu-ti「土」
zu「知る」	tši「知る」		ši-ruu「知る」

上の一覧表は、シュメール語が中国語と同系の言語であることを如実に物語っている。そしてまた、シュメール語が日本語や朝鮮語とも同系であることを示している。これらの言語間では、非常に多くの語が語根のレベルにおいて驚くほどに一致している。接頭辞と接尾辞のレベルにおいても大きな類似点が観察される。たとえば、シュメール語の-lや-rは日本語の-ruuと似ている。この類似性は、これら接辞が*-gaという同一の源から発したことによるものであることを物語っている。なお、中国語には接辞なるものがもともと存在しなかったと思われるかもしれないが、たとえば-nや-ngは*-gaの反映形が接尾辞として存在したことを示す痕跡ではないかと考えられる。

シュメール語の語彙に関する調査はこれだけにして、最後に、エラム語の語彙を検討する。上述のように、エラム語の語彙は辞典・語彙集という形での整理が立ち遅れており、その全容を把握することが困難である。したがって、ここではほとんどもっぱらハロック(1969)の『バルセポリス城砦文書』に付された語彙集からいくつかの語を抜き出し、それらと同源と見なされる他言語の形態を指摘するにとどめる。

<表10>エラム語と他言語との語彙比較

- a-m-ma 「母」→シュメール語：a-ma 「母」、ビルマ語：ʔa-mí 「母」、ツォナー・モンバ語：a-ma 「母」、チベット語文語：ma 「母」、モンゴル語：a-na 「母」、トルコ語：a-n-nā 「母」、朝鮮語：o-m-ma 「母」、琉球語：ʔa-n-ma 「母」 cf. 満州語文語：a-ma 「父」、e-ni-ye 「母」
- a-ni 「～な(禁止)」→朝鮮語：a-ni 「～ない(否定)」、古代日本語：a-ni 「豈」(決して)

「どうして」の意)

ba-te-「放牧する」→中国語：fà-ng「放牧する」、ba-n「番をする」、古代日本語：ba-n「番」(漢語か?)

da-「置く・送る」→古代日本語：tu-ku/to-ku「付く・着く・就く」

du-k-ka「育てる?」→古代日本語：so-da-tu「育つ」

du-nu-「与える」→ブナン語：da-「与える」、マンチャト語：ra-n-、古代日本語：a-ta-
φu「与ふ」

ha-du-「あてがう」→古代日本語：a-tu「当つ・宛つ・充つ」

ha-ša-「数える」→古代日本語：ka-zo-φu「数ふ」

ha-sa-na「おとな」→古代日本語：o-to-na「大人」、wo-sa「長」、wo-sa-mu「治む」

i-z-zi-「出て行く」→古代日本語：i-zu「出づ」

ka-tu-「生きる」→中国語：hu-ó「生きる」、古代日本語：i-ku「生く」

ki-「ついて行く・来る」→古代日本語：ki「来」

KI「場所」→シュメール語：ki「場所」、古代日本語：ka / ku / ko「処」

kur「手」→モンゴル語：gar「手」

KOR「山・陸」→シュメール語：kú-r「山・陸」、パイワン語：ga-du「山」、朝鮮語：
ko:l「谷」、古代日本語：ku-nu-ga / ku-ga「陸」

ku-ti-「運ぶ」→中国語：ká-ng「担ぐ」、tí-ā-o「担ぐ」、古代日本語：ka-tu-gu「担ぐ」

la-「出す」→古代日本語：(i)da-su「出す」

ma-「出す・発する」→古代日本語：ma-ru「(大小便を)まる」、mo-ru「漏る」

MA'「舟」→シュメール語：mà「舟」

mu-ti/mu-tu-r「女」→モンゴル語：e-m「女」、ランパ語：tša:ma「女・娘」、カナシユ
語：tši-me「女・娘」、古代日本語：me「牝・雌・女・妻」、wo-mu-na「若い女」

-ra「～人」→古代日本語：-ri「～人(助数詞)」

ru-h「人」→シュメール語：lú「人」、ビルマ語：lu「人」

-(i)š「～人」→中国語：-šì「氏・士」、-šī「師・司」、トルコ語：-ci「～人」、モンゴル
語：-či「～人」、ビルマ語：-tu/-du「～人」、ナシ語：ci「人」、ロコ語：tsho「人」、
タケルマ語：-s / -sī / -sā「～人」、朝鮮語：-jī / šī「～さん」(a-bo-jī「お父さん」
やa-ga-šī「娘さん」など)

sa-「行く・去る」→中国語：sá-n「散らばる」、モンゴル語：ja-b-「行く」、古代日本
語：sa-ru「去る」

ša-ra-「切断・遮断・分配する」→中国語：tšē「遮断する」、古代日本語：ta-tu「絶つ・
断つ・裁つ」

ši-n-nu「行く・来る」→シュメール語：i-r-「行く」、モンゴル語：i-r-「行く・来る」、
古代日本語：i-nu「往ぬ・去ぬ」、ši-nu「死ぬ」

- šu-tu 「姉妹」→シュメール語：še-š 「兄弟」、古代日本語：še 「兄・夫・背」、ši-u-to 「舅」cf. エラム語：i-ke 「兄弟」、古代日本語：i-mo 「妹」
- ša-k 「息子」→中国語：cī / tsi 「息子」、ナシ語：sa 「息子」、ツオナー・モンバ語：ʔa-tce 「兄」、古代日本語：mu-su-ko³¹ 「息子」、cf. mu-su-me 「娘」、ナシ語：sa-mi 「娘」
- ta-r-ma- 「完了する」→古代日本語：to-guuまたはtō-guu 「迷ぐ」、-ta-ri 「～たり（完了の助動詞）」
- ti-ri- 「話す・言う」→古代日本語：tuu-guu 「告ぐ」
- zi- 「見る」→中国語：sī 「見る」、モンゴル語：ü-dz- 「見る」
- zi-yan 「寺院」→中国語：sì-yu-àn 「寺院」

上の一覧表を見れば、エラム語の語彙もまた中国語や日本語の語彙と系統的にかかわっていることが知られよう。筆者が同源と判断した語の中には見当はずれのものも含まれているかもしれないが、それはエラム語がアジア太平洋諸語の一員であるという主張をくつがえすことにはなるまい。

謝辞：中国語と朝鮮語に関する煩わしい質問に快く答えてくださった名古屋大学大学院国際言語文化研究科の留学生のみなさんに心から感謝いたします。

注

- 1 トムセン(1984:68)に依ったが、一部修正を施した。
- 2 gの正確な音価については定説を見ていない。
- 3 ツングース諸語の他言語では、1人称単数代名詞はbiかbiかbiiである。これらの成り立ちもmiと同じであったと考えられる。
- 4 トムセン(1984:71)に依った。
- 5 トムセン(1984:219)に依った。
- 6 トムセン(1984:88)に依ったが、一部修正を施した。
- 7 終止格(terminative)とも言われる。
- 8 筆者の造語である。一般には、位格・終止格(locative-terminative)などと呼ばれる。なお、この格が表す典型的な意味は‘near to’である。
- 9 動詞の重複形は未完了態を表す。
- 10 -naは-ni-a(k)という構成であり、先行属格と言われる末尾の-a(k)が後続の-ba(<-bi-a)の-biと呼応関係にあるとされている。

- 11 ライナー(1969:89)に依った。
- 12 1人称単数の独立代名詞はhweである。ゴッダード(1911:120)はhweの語頭部分が動詞人称接辞の-wあるいは-ūwになったとしているが、私見では、*-gaが弱化してできた-wあるいは-ūwから独立代名詞のhweが形成された可能性のほうが高い。
- 13 ライナー(1969:76)に依った。
- 14 ライナー(1969:76)に依った。ペイパー(1955:41)は以下のようなパラダイムを提示している。
- | | 単数 | 複数 |
|-----|------------|------------|
| 1人称 | /-V / | /-ut / |
| 2人称 | /-ti~-ta / | /-ti~-ta / |
| 3人称 | /-š / | /-š / |
- 15 ライナー(1969:77)による‘gender suffixes’の分類を参考にした。
- 16 ライナー(1969:102)によれば、中期エラム語の終わりころには/-k/が摩擦音化して/-h/になったという。
- 17 -tであった可能性が高いけれども、実例が見つかっていない。
- 18 石井(1992:40)を参照した。
- 19 吉川(1989:232)によれば、wは樹目・木製品を示す限定詞、GEŠTINはワインを意味するロゴグラム、lgは先行語がロゴグラムのときに用いられる限定詞である。また、後続のm.Ú-sa-ya-naにおけるmは男性を示す限定詞である。
- 20 -te’ī-nは日本語の-čya-n「～ちゃん」(<-sa-ma「～様」)と同源。
- 21 ti(-ti)は朝鮮語の-jiと同源、すなわち語幹が失われた形。また、to(-to)は-ti(-ti)の母韻交替形。
- 22 -niは日本語のni-sō「尼僧」と同源で、本来は「女」の意。
- 23 φa-φaは接頭辞だけが残った形。ka-kaも同じ。琉球語では?a-ma「母」と言うので、*ga->ka->?a->φa->ha->a-という変化が起こったと考えられる。チベット語文語ではa-も消失して、ma「母」となっている。
- 24 šé-n-gはシュメール語の-si(-g)に相当する。すなわち、語尾だけが残った形である。歴史的にいうと、na-は接頭辞であり、-φuにシュメール語のba-に相当する部分が含まれている。
- 25 na-φaは、動詞na-φuに名詞化接辞-a(<*-ga)が付属して形成されたと考えられる。
- 26 wa-lは語根部分が失われ、本来は名詞化接辞であった。語尾だけが残った形。

- 27 「魚」を意味する語は、チベット・ビルマ語派のハニ語ではŋa、ビルマ語ではŋâ、チベット語文語ではngaである。これらがシュメール語gáと同源であることは明白である。ちなみに、アンガミ語のkhu-ôは古代日本語のu-woによく似ている。
- 28 日本語のši-ra-miは、古い語形をほぼ完全に保存しているようである。シュメール語のla-m-mu-biは語頭部分を失い、中国語のsīは語頭部分だけを残している。シナ・チベット語派の多数の言語において、「風」を意味する語は本来の語形の語頭部分あるいは語中部分だけを残して、あとの部分は消失している。
- 29 本来は「雌牛」を意味したsu-kɔ-tが「雄牛」を意味するようになったため、「女」を意味するa-m- が付加され、続いて「牛」を意味するkɔ-tが脱落したと考えられる。
- 30 [t] が [š] [s] の音に変化したと考えられる。このような変化が起こりうることは、たとえば古代日本語のti(-ti)「父」あるいはto(-to)「父」が東国方言でši-ši「父」であったことによって理解されよう。
- 31 mu-sui-ko「息子」のmu- は、mu-sui-me「娘」のmu- の類推によるもの。このmu- は、語尾の-meと同様に本来は「女」の意。一方、-suiはシュメール語のša- と同源で、「自分の」という意味であったと考えられる。中国語のcī「息子」とナシ語のsa「息子」は「子」を意味する部分が失われ、「自分の」を意味する部分だけが残った形であろう。なお、ツォナー・モンバ語?a-tce「兄」の?a- は親族名詞に付される接頭辞で、これはシュメール語のa-bu「父」やa-ma「母」のa- と同源である。おそらく、これらの?a- やa- は属格接辞*-gaの反映形であり、本来は「私の」という意味を表したと考えられる。

引用文献

- 石井 溥 (1992)、「ネワール語」 亀井 孝・河野六郎・千野栄一著『言語学大辞典』第3巻：37-45. 三省堂。
- 近藤健二 (2003 a)、「具格接辞の変貌とアジア太平洋諸語の系譜(1)」『言語文化論集』第XXIV巻第2号：61-76. 名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科。
- (2003 b)、「具格接辞の変貌とアジア太平洋諸語の系譜(2)」『言語文化論集』第XXV巻第1号：31-65. 名古屋大学国際言語文化研究科。